

**生徒の「主体的・対話的で深い学び」を生み出す授業づくり
～N I Eを活用した，課題意識をもち，追究する生徒の育成～**

新潟市立大江山中学校

1 N I E実践のねらい

(1) 校内研究主題とのかかわり

大江山中学校生徒のストロングポイントは、自己有用感が高く、生徒間の話し合いも活発であり、学校生活を楽しんでいる生徒が多いことである。また、ウィークポイントは自分で考え判断し行動する力に乏しく、夢をもてない生徒が多いことである。

このことから、本校では『生徒の「主体的・対話的で深い学び」を生み出す授業づくり』を研究主題とし、3年目となる。ストロングポイントを伸ばし、ウィークポイントを改善するために、N I E実践を研究主題と絡め、「自ら課題意識をもち、追究する生徒」を育成しようと考えた。

具体的には、生徒に以下の『3つの力』を身につけさせることを、ねらい達成のための有効な手立てとして実践を進めた。

①「なぜ、どうして」に気づく力

様々な情報をインプットしていく中で、社会への関心をもち、疑問を感じていく。

②「自分ならどう考えるか」と主体的に考察していく力

疑問を感じた情報を、自らの課題としてとらえていく。

③「自分の考えを伝える，他人の考えを聞く」という表現力と対話力

自分の考えをまとめながら具体的な言葉でアウトプットするとともに、他人の考えを聞くことで、より一層自分の学びを深めていく。

(2) 新聞記事活用の位置づけ

インターネットや書籍など、世の中は情報であふれている。インターネットは検索方法にもよるが、偏った情報だけを得ることも多い。また、書籍はエビデンスに基づく内容が多いが出版まで時間がかかるため、届く情報が遅い。現代を生きる子どもたちには、必要な情報を必要なタイミングで正しく取捨選択していく力が求められる。

新聞はインターネットほど発信が早くなく、書籍ほど内容が深くはないが、広範囲にわたる記事が毎日発信されている。また新聞には、多種多様な活字情報が載っており、読み手に伝わりやすいように「逆三角形」の文章構造や、

「5W1H」の文章構成がなされている。それらの中から必要な情報を整理したり、人に伝えたりする活動が可能である。

本校では、新聞の「読み方」を学んだ後、NIEを活用することで、課題意識をもち、追及しながら授業や日常的な取組を継続させることで、身につけさせたい3つの力の育成に迫り、学力向上及び、日常生活への効果的な変化を期待する。

2 本年度実践の概要

先に示した3つの力を高めるために、4つのプロジェクトを推進した。

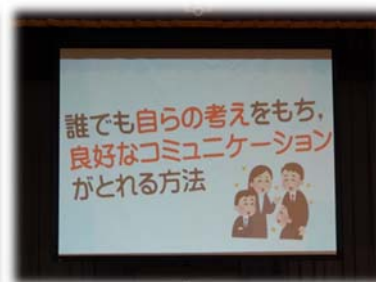
(1) プロジェクトD **【新聞に親しむ啓発活動】**

まずは「新聞に親しむ」ところからスタートし、生徒1人1人がNIEに積極的に取り組みたいくなるよう啓発活動を行った。

① 学年朝会でNIE説明

今年度のスタートは新型コロナウイルスの対応として全校で集まることができなかった。そのため、学年朝会で

「NIEは世界中で実践されていること」「日本新聞協会のNIE効果測定調査」「PISAの得点と新聞を読むことの相関関係」などについて解説しながら「なぜ君たちにNIEが必要なのか」を3回に分けて説明した。



← 学年朝会で、NIEの良さについて真剣に学ぶ生徒たち。

② きらきらキラリ投稿

新聞に親しむための2つめの取組として、「新聞投稿(新潟日報:きらきらキラリ)」を行った。結果的に2名の投稿が記事として掲載され、本人はもちろん、生徒全員が新聞に目を通したくなるきっかけの1つになった。



↑ 掲載された投稿記事。生活と新聞との距離がぐっと密接になった。

③ 日報記者による講演

新潟日報の記者に来校してもらい「新聞の読み方」についての講演を行った。

「逆三角形」の文章構造や、「5W1H」の文章構成につ



← 新聞の読むポイントや、見出しの意味についての講義を聞いてイメージを膨らませる生徒たち。

いて知識を学んだ後、興味を引く新聞記事を使って「見出しづくり」を行った。生徒は見出しをつくるために、まずは本文を読み込んだ。グループで相談しながら考えることで、記事構成の面白さに気づき、活動にのめり込んでいった。

2020.8.6 付け, 新潟日報

↑ 王輝氏が十両に昇進する記事に見出しをつけた。

(2) プロジェクトA 【日替わり！日直の新聞記事紹介】

日替わりで日直が、「今日の気になる新聞記事」を紹介することで新聞を読み、終学活で記事を踏まえ、自分の考えを発表する活動を行った。

① 担任のお手本

朝学活で、学級での新聞活用の具体例や興味を引きそうな記事を担任が紹介し（見出しだけでも良いし、簡単な内容紹介でも良い）、どういう視点で新聞を読めば良いのかを示範した。

↑ 終学活で学級の皆に記事と考えを発表した。

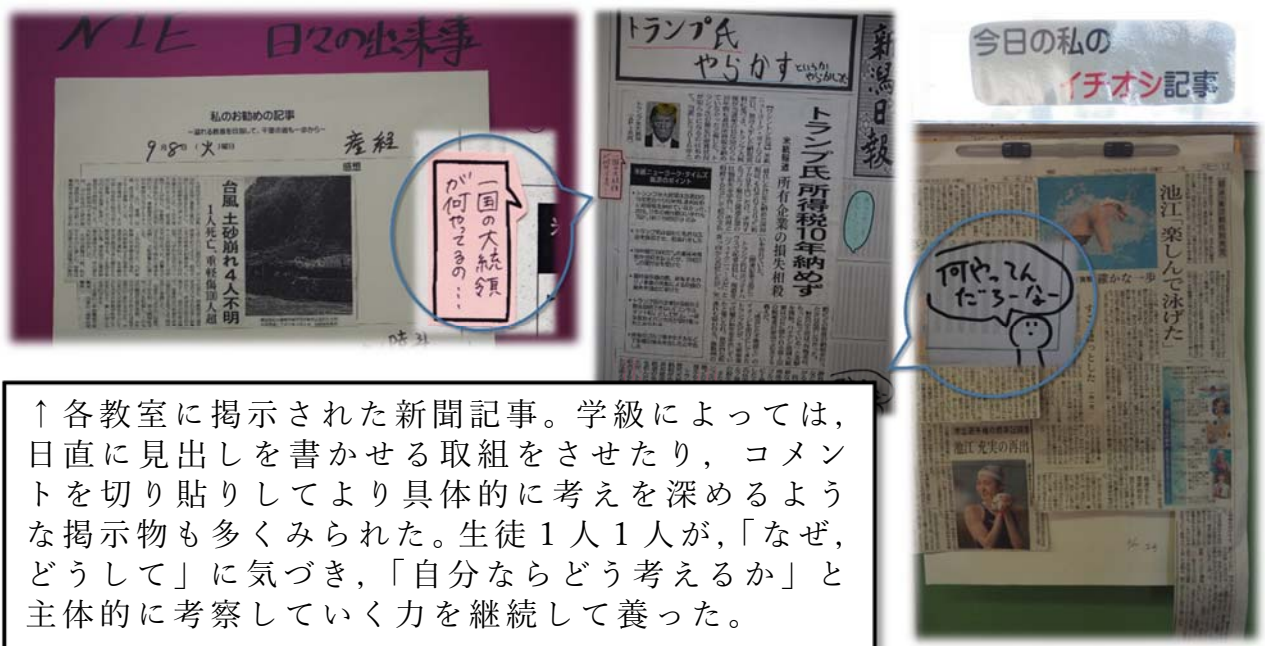
② 日直の新聞記事紹介

終学活で日直が、興味関心を持った記事を紹介し、記事についての自分の感想や思いを発表した。

③ 紹介記事を掲示

掲示係などの学級の実態に応じた係が、各新聞の固定連載や中学生の投書・おもしろ写真などを切り貼りし、教室に掲示する。

このように、必ず全員が新聞に関わる活動を行うことで、新聞を読むことに対する苦手意識(難しそう)を緩和し、興味関心を高めていった。



↑ 各教室に掲示された新聞記事。学級によっては、日直に見出しを書かせる取組をさせたり、コメントを切り貼りしてより具体的に考えを深めるような掲示物も多くみられた。生徒1人1人が、「なぜ、どうして」に気づき、「自分ならどう考えるか」と主体的に考察していく力を継続して養った。

【各社新聞ローテーション表】

日程／学級	1－1	1－2	2－1	2－2	3－1	3－2
9月～10月	読 売	読 売	日 経	日 経	産 経	産 経
11月～12月	日 報	日 報	毎 日	毎 日	朝 日	朝 日

(3) プロジェクトB 【日替わり！NIEコーナー】

学校司書と生徒会で連携を図りながら，校内掲示物を充実させた。

①学校司書のオススメ記事コーナー

新聞からオススメ記事を毎日ピックアップして階段の踊り場に掲示した。ぱっと見で気を引くようなポップなレイアウトが施されており，生徒は立ち止まって，興味深く記事を読んでいた。

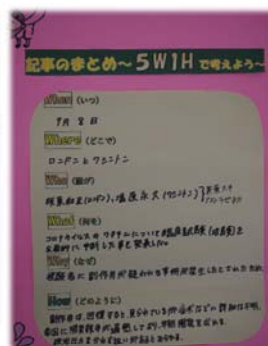


←毎日レイアウトを工夫した掲示板をつくり，新聞に親しめる環境作りが行われた。

中学生が興味を持ちそうな記事を扱ったり，クイズ形式で記事を掲示したりと，生徒が気軽に向き合いやすくなる掲示物が多く見られた。

②図書室のNIEコーナー（生徒会活動との連携）

生徒会活動とも連携し，学校司書と広報図書委員会で図書室にNIEコーナーを設置した。その中で，広報図書委員会の生徒が「新聞記事紹介スペース」を設置し，テーマを決めて定期的に作成し，掲示した。また，過去の新聞記事を新聞社別にいつでも閲覧できるように設置した。



↑図書室内や図書室前廊下に掲示された広報図書委員会の掲示物。NIE活動は生徒会も巻き込んだ全校体制として盛り上がりを見せた。

(4) プロジェクトC 【N I E活用研究授業】

【授業実践1】3年2組 社会科 公民的分野「司法権の独立と裁判」

① 授業の目標

香川県のゲーム依存症対策条例について、合憲か違憲かを多面的・多角的な視点に立って根拠を整理することを通して、人権の尊重や慎重な裁判の場を確保することの意義について理解を深める。

② 授業の内容

課題 現在、行政裁判で争われている香川県のゲーム依存症対策条例は、合憲だろうか違憲だろうか。それぞれの根拠を整理してみよう。

活動 ・生徒のゲームやスマホの利用の実態を尋ねた後、香川県のゲーム依存症対策条例をめぐる裁判の新聞記事を読み、裁判事例と条例の内容を確認する。

発問 もし、あなたが裁判官ならば、現時点で、このゲーム依存症対策条例は合憲か、それとも違憲かどのように判断しますか。

活動 ・自分の考えで、合憲・違憲に分かれる。
・ゲーム条例に関する4つの新聞記事を配り、それぞれの記事から要点を読み取る。
・個人→グループの流れで、合憲または違憲と判断する根拠を考える。
・その根拠が科学的側面をもつか、または法的な側面をもつかを整理し、全体で考えを共有する。

発問 もう一度、ゲーム条例が合憲か違憲かを判断し、その根拠を書いてみましょう。

活動 ・最初の発問時と意見が変わった場合は、反対側に移動し、なぜ判断が変化したのかを発表する。

まとめ 人権を尊重し、慎重な裁判を実施するためには、合憲・違憲の根拠を丁寧に整理することが重要である。



③ 新聞記事の活用

a 教材提示としての活用

オンラインゲームは中学生にとってかなり身近なものなので、感情移入しやすく問題意識をもちやすかった。

b 「根拠」を示すための情報入手

合憲か違憲かの判断については、それぞれの立場での「根拠（主張

を成立させる裏付け)」が必要となるため、その「根拠」を新聞記事から探し、整理することで、判決が慎重に下されるものであることを理解することができた。

④ 使用記事

- 資料1 朝日新聞 「ゲーム時間、自分で決める」高松の高校生ら、県を提訴 (2020年10月1日朝刊)
- 資料2 産経新聞 休校 ゲーム依存危機 専門家「時間などルール決めて」 (2020年4月23日朝刊)
- 資料3 新潟日報 ネット依存に注意を 専門家が現状を報告 (2019年6月23日朝刊)
- 資料4 毎日新聞 ゲーム条例の学習会「9割超、依存と無関係」大阪大講師が説明 (2020年1月27日朝刊)
- 資料5 毎日新聞 香川ゲーム条例に弁護士会が反対声明 「自己決定権侵害の恐れ」廃止求める (2020年5月26日朝刊)

⑤ 協議会

- ・新聞のもつ多面性（立場の違い）がわかりやすく伝わっていた。
- ・データや表には、新聞としての現実的な信頼性がある。
- ・客観的に考えさせるためには、たくさんの方の立場から書かれた記事を読むことが大切であり、いろいろな新聞社の記事を使って考えると面白い授業になる。



【授業実践2】3年1組 家庭科 「私たちの成長と家族・地域～子どもを取り巻く環境としての家族の現状を考えよう～」

① 授業の目標

子育て支援のための制度について、新聞記事を比較して読むことで、現状と課題に気づき、解決のためにできることを考える。

② 授業の内容

課題 なぜ、男性が育児休業を取る割合が増えないのだろうか？

- 活動
- ・前時までに学習した育児休業制度には具体的にどんなものがあったかを振り返り確認する。
 - ・現在8%である育児休業取得率を、「2025年までに目標30%」とする記事を、数値に着目させながら読む。



- ・男性の育休取得率の記事からグラフだけを取り出して見る。

発問 記事を読み、男性の育児休業取得が増えないのはなぜか考えよう。

- 活動
- ・個人→グループの流れで、男性の育児休業取得率が増えない理由をまとめる。
 - ・吹き出しカードを活用して、黒板に貼っていく。

発問 自治体の支援はどうだろう。新潟市の現状を見てみよう。

- 活動
- ・各自治体で独自に推進している取組の記事を読む。
 - ・グループごとに発表し、共有する。

まとめ 男性の育児休業取得割合が増えないのは、収入が減る不安と職場の雰囲気によるところが多いことがわかる。

振り返り発問

子育て中のお父さん・お母さんに、みんながしてあげられることはないだろうか？自分は～、という視点で振り返りを書こう。



③ 新聞記事の活用

「なぜ、どうして」に気づく力の育成

育児休業取得率にかかわる新聞記事には具体的な数値や視覚的にわかりやすいグラフが記事と併せて掲載されている。そのため、生徒自身にとって、身近ではない子育ての題材であっても、理解しやすかつ多面的な情報が得られた。

④ 使用記事

資料1 読売新聞

「社説」取得率の底上げを着実に図れ

(2020年10月19日朝刊)

資料2 市報にいがた 応援しています 男性の育児休業

(2020年9月20日発刊)

⑤ 協議会

- ・新聞記事は見出しがあり、構成がしっかりしているため見やすく、わかりやすい。また、説得力があり身近に感じられた。
- ・同じテーマでも新聞社ごとに見方や表現が違っていて、比較することで多面性が生まれる。
- ・教科書＋新聞記事を活用することで、単なる資料ではなくなり、生徒は信憑性を高く感じ、授業にのめり込む。

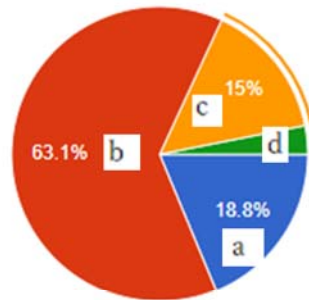


3 成果とこれから

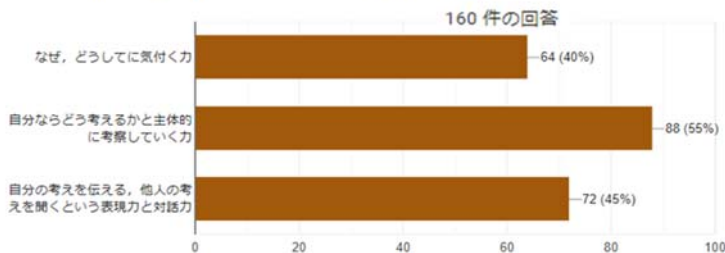
① 4月に比べて新聞に関心をもつようになりましたか

160 件の回答

- a ● 非常になった
b ● ややなった
c ● あまりなっていない
d ● 全くなっていない



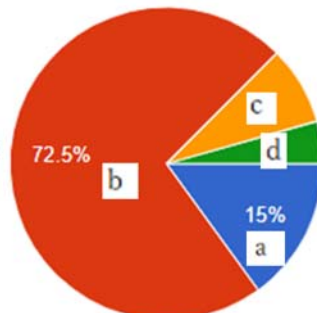
② N I E 活動を通してどんな力が身に付きましたか、あてはまるものすべてを選んで下さい。



③ 今後、新聞とどうかかわっていきたいですか

160 件の回答

- a ● しっかり読むようにしていきたい
b ● 興味がある見出しの内容だけでも読んでいきたい
c ● 見出しだけチェックしていきたい
d ● まったく読むつもりはない



【N I E 生徒アンケートより】

① 81.9%の生徒が新聞への関心を高めたと回答している。

- ・日常的に新聞に触れる機会をもつ活動を継続したことが効果的であった。
- ・記述からは、記事内容について友達と会話をする機会が増加したと回答する生徒が多い。

② 過半数が「自分ならどう考えるかと主体的に考察していく力」が身についたと感じている。

- ・日直の新聞記事紹介や生徒会によるN I E コーナーづくりを通して、「発信する」機会を多く得られたことから、記事を読み、考える力の向上につながった。

③ 87.5%の生徒が今後も新聞を読みたいと回答している。

- ・N I E 授業で仲間と対話しながら考察する学習を通して、その情報量の豊富さとわかりやすさに気付いた経験から、日常的に新聞を読む意欲が高まった。

N I E 研究 2 年間を通して、本校のストロングポイントである、生徒間の話し合いが活発である力を発揮しながら活動を推進した。その結果として、市の生活学習意識調査では「学習や生活において、自分で考え課題を解決したり、自分で判断して行動したりしている」の項目結果が右表のように変容した。

年度	H 3 0	R1(14年)	R2(15年)
A B 評価	83.9%	87.6%	90.2%

ウィークポイントである「自分で考え判断し行動する力に乏しい」とされる力が改善されたといえる。研究主題に関わってねらいとした、『N I E を活用した、課題意識をもち、追究する生徒の育成』の達成に迫ることができた。

成果からわかる通り、継続した日常的な活動の推進が冒頭の『3つの力』の育成につながり、それが授業に効果的に生きてくる。「N I E」が学校全体に1つの文化として根付いた今、継続した取組を続け、これからも着実に生徒の力を伸ばしていく。

(林 良平)